

『詳説世界史 改訂版』（世探 081-901） おもな改訂箇所

改訂版の頁	場所	世探 704	世探 081-901 (改訂版)	理由・補足など
世界史へのまなざし				
5	註②	②新人は旧人の直接の子孫ではなく、別系統の人類であることが近年の研究で明らかになっている。	②旧人がそのまま新人に進化したわけではないが、旧人が絶滅前に新人と交雑した可能性は近年指摘されている。	ネアンデルタール人の DNA が解析されたことなどを背景とする近年の研究動向にもとづいて、記述を変更。
6	表	世界の諸言語の系統分類表 アルタイ語族	アルタイ諸語	より適切な表現に変更。
第1章				
15	部扉	扉図版（「アケメネス朝・ペルセポリスの宮殿跡」）を、図「諸地域の古代文明の展開(前7世紀頃まで)」に変更		第1章全体の見直しや、「世界史のまなざし」（先史部分）と第1章とのつながりをよりわかりやすくするため。
19	註④		(註を新設) ④ただし、口頭での伝承や古代アメリカ文明のキープ（→p.36）のように、文字以外による記録・伝達方法が発達することもあった。	文字の発明といった典型的な文明・文化のありかた以外にも、無文字文化など様々なかたちの文明・文化が存在することが理解できるような記述に変更。
23	21～22行 ・ 註④	前14世紀にはアメンヘテプ4世（アクエンアテン）が…	新王国のもとで神官団の権力が増すと④、前14世紀にアメンヘテプ4世（アクエンアテン）が… ④新王国ではテーベの守護神であるアメン（→p.24）の神官団が勢力をのびし、ついには王権をおびやかした。	アメンヘテプ4世による改革の背景を補足。 ※佐藤次高編『世界各国史8 西アジア史』（山川出版社、2002年）参照。
24	18～19行	前13世紀頃にギリシア・エーゲ海方面から「海の民」と呼ばれる人々が進出し、…	前13世紀頃にはギリシア・エーゲ海方面から系統不明の「海の民」と呼ばれる人々が進出するなど東地中海一帯で変動がおこり、…	前13世紀頃の東地中海における変動という大きな流れにふれたうえで、「海の民」をそのなかの一つとするかたちに変更。
26	註②		(註を新設) ②「旧約」（旧約）はキリスト教側からの呼称で、ユダヤ教では『ヘブライ語聖書』と呼ばれる。	ユダヤ教側の呼称を補足。
27	註⑦		(註を新設) ⑦新王国は、「海の民」など外部勢力の侵入を受けて弱体化し、前11世紀に滅亡した。	エジプト新王国の滅亡に関する記述を補足。
27	18～20行	アッシリア王は…（中略）…専制君主であり、国内を州にわけ、駅伝制を設け、各地に総督をおいて統治した。	アッシリア王は…（中略）…専制君主であった。征服地の住民を強制的に移住させるとともに、国内を州にわけ、駅伝制を設け、各地に総督をおいて統治した。	アッシリアの強制移住に関する記述を補足。
28	註①		(註を新設) ①インド北部の乾燥地帯であるインダス川流域では、西アジアで始まった麦作や牛の放牧（→p.18）が前3500～前3000年頃には営まれるようになり、インダス文明の基盤となった。	第1章の趣旨に鑑み、西アジアと南アジアとの関連性を示す註を補足。
29	5～7行	源流と考えられている。インダス文明…	源流と考えられている。また、出土品から、ウルなどメソポタミアの諸都市との海上交易がおこなわれていたこともわかっている。インダス文明…	同上
33	13～22行	塩業で栄えた黄河下流域の齊、長江流域の文化圏に拠った楚、採集を生業とした東北の文化圏を代表する燕、遊牧民族の戦術を取り込んだ趙、西方の牧畜地域をおさえた秦など、とくに有力な7つの国は「戦国の七雄」と呼ばれる⑤。…（中略）…この「中国」意識は、みずから文化の中心とし、生活習慣の異なる他者を「夷狄」とさげすむ華夷思想と結びついていた。	塩業で栄えた黄河下流域の齊、長江流域の文化的独自性を発展させた楚、東北の森林地帯の資源をおさえた燕、遊牧民族の騎馬戦術を取り込んだ趙、対抗勢力の少ない西方の牧畜地域で新制度の摂取を進めた秦など、とくに有力な7つの国は「戦国の七雄」と呼ばれる⑤。…（中略）…こうした「中国」意識は、みずから文化の中心（中華）とし、生活習慣の異なる他者を野蛮人（夷狄）とさげすむ華夷思想と結びついていた。	個々の「戦国の七雄」の説明や、華夷思想の説明について、よりわかりやすいように補足・変更。

33	註⑥		(註を新設) ⑥いくつかの国では、王の権力を強化するための一連の制度改革(変法)がおこなわれ、とくに商鞅(→p.34)による秦の変法は成果をあげた。	第2章とのつながりも念頭において、「変法」に関する註を補足。
35	27～30行	16世紀に進出してきたヨーロッパ人に征服され、滅亡することになる。	16世紀に進出してきたヨーロッパ人に征服され、滅亡した。しかし、先住文明のもとではぐくまれた農作物はのち世界各地に伝えられ、人びとの生活を大きく変えることになった。	南北アメリカ文明の世界史的意義がよりわかりやすいように、記述を補足。
35	地図	南北アメリカ文明とそのおもな遺跡 チャンチャン チャビン	チャン=チャン チャビン=デ=ワンタル	より適切な表記に変更。
36	3～10行	メキシコ南部と中央アメリカの先住民文明の原型となったのが、前1200年頃までに成立したオルメカ文明である。その衰退後に、ユカタン半島でマヤ文明が成立し、メキシコ南部ではテオティワカン文明が、その後にアステカ王国を中心とするアステカ文明が成立した。マヤ文明は4世紀から9世紀に繁栄期を迎え、…(中略)…道路網でメキシコ各地と結ばれた巨大都市①や複雑な身分制度をもつ国家を築いた。	メソアメリカ地域における先住民文明の原型となったのが、前1400年頃までに成立したオルメカ文明である。前1000年頃にはユカタン半島でマヤ文明が成立し、メキシコ高原ではテオティワカン文明が、その後にアステカ王国を中心とするアステカ文明が成立した。マヤ文明は長期にわたって繁栄し、…(中略)…メキシコ各地から貢納品を運ばせる道路網や巨大都市①、複雑な身分制度をもつ国家を築いた。	オルメカ文明・マヤ文明の年代や表記を近年の研究動向にあわせて変更。
36	19～22行	これらの中南米の先住民文明は、大河ではなく雨水や泉を活用することで丘陵・山岳に都市を築いた。また鉄器や車輪、馬などの大型の家畜は利用されなかった。	こうしたアメリカ大陸の先住民文明は、大河に依存するのではなく、中小河川や湖沼、雨水、泉を活用することで平地・丘陵・山岳に都市を築いた。また、鉄器や車輪を用いず、馬や牛による牧畜業が発達しなかったことなども、他地域の古代文明と異なる特徴である。	古代アメリカ文明の特徴に関する記述を、より適切なかたちに変更。
第2章				
41	註⑦	⑦各地の特産品を国家がほかの地方へ輸送して物価を均一にする政策(均輸)と、貯蔵した産物の価格が上がると売り出し、下がると買い入れて、物価の水準を保つ政策(平準)があった。	⑦物資の流通に国家が関与して物価水準を安定させる政策(平準)と、地域間の物資の輸送を円滑にして過不足を均等にする政策(均輸)がとられた。	制度の実態に鑑みて、よりわかりやすい表現に変更。
45	図キャプション	北魏初期の祭天遺跡 中国・内モンゴル自治区フフホト市の北(かつての武川鎮付近)にある、遊牧文化と中国文化の融合を示す遺跡。北朝初期に、中国式の円形の祭壇において、遊牧的な方法で天をまつ儀式がおこなわれていたことが、発掘調査で明らかになっている。	中国・内モンゴル自治区フフホト市の北(かつての武川鎮付近)にある。円形の壇は遊牧文化の伝統とも、中国文化の影響ともいわれる。天を祭祀の対象とする観念を共有していたことは、遊牧文化と中国文化が融合していくきっかけの1つとなった。	図版の意義がより理解しやすいように記述を変更。 ※阿部幸信「資料 読み解き! 北魏の祭天遺跡」『山川歴史 PRESS』No.29、2025年12月なども参照。
47	註④	④朝鮮半島や中国から日本に移り住んだ人々を渡来人と呼ぶ。渡来人は日本に先進的な技術や文化を伝える役割を果たした。	④朝鮮半島や中国から日本に移り住んだ人々を渡来人と呼ぶ。渡来人は、金属工芸や漢字による文書作成などの先進的な技術・文化を日本に伝える役割を果たした。	渡来人が伝えた文化がより具体的にわかるように変更。
47	14～16行	統一が進んだ。	統一が進んだ。ヤマト政権は朝鮮半島の鉄資源を求めて百済や加耶諸国と連携し、のちに百済からは儒学や仏教が日本に伝えられた。また朝鮮半島との深い関わりのなかで、騎馬の習慣も日本へ広まった。	第1章や第2章全体のつながりを考慮して、朝鮮半島経由で日本へ伝播した技術・文化に関する記述を補足。
50	註②		(註を新設) ②王族を「真骨」とし、それ以外の氏族を「品」によって等級づけて、官位や生活全般を規制した制度。都に住む人々にのみ適用された。	骨品制に関する説明を補足。
52	註⑤		(註を新設) ⑤一方の西突厥はビザンツ帝国(→p.93)やササン朝(→p.64)と関係を持ち、玄奘(→p.49)の旅行も保護したが、7世紀半ば唐に敗れて衰退した。	西突厥に関する説明を補足。
53	註⑥		(註を新設) ⑥こうした動きは、のちに草原地帯におこって南の定住農耕地帯をも支配したキタイ(→p.137)やモンゴル(→p.144)につながるものであった。	第8章など以降の記述とのつながりを考慮し、「中央ユーラシア型国家」に関する記述を補足。※現行版『詳説世界史 教師用指導書 授業実践編』79頁「遊牧国家の変化」なども参照。

第3章				
55	3～6行	前4世紀、マケドニアのアレクサンドロス大王がアケメネス朝を滅ぼし、さらに西北インドにまで進出した。王はインダス川流域を転戦し、各地にギリシア系の政権が誕生した。	<u>ガンジス川流域でマガダ国が繁栄する一方、西北インドには前6世紀にイランのアケメネス朝が進出した。しかし前4世紀、西方からマケドニアのアレクサンドロス大王が侵攻してアケメネス朝を滅ぼすと、彼はさらにインダス川流域へ進出し、各地にギリシア系の政権が誕生した。</u>	次の第4章におもな記述があるアケメネス朝やアレクサンドロス大王が先行して登場することから、経緯や背景について補足。
56～57		小見出し「インド洋交易と南インドの諸王朝」の第2段落の記述や図「インド洋航海図」を全体的に見直し。		
61	11～14行	大陸部では、…(中略)… <u>カンボジア</u> がおり、扶南を滅ぼした。この王国は、9世紀以降アンコールに都をおき、12世紀には…	大陸部では、…(中略)… <u>カンボジア</u> がおり、 <u>7世紀には扶南を滅ぼした。この王国は、9世紀以降アンコールに都をおき、インドの稲作技術を導入して開発を進めた。12世紀には…</u>	第1部の趣旨に鑑み、生業・産業に関する記述を補足。
61	16～22行 ・ 註③	エーヤワディー(イラワディ)川下流域では、9世紀までビルマ(ミャンマー)系のピュー人の国があった。…(中略)… チャオプラヤ川下流域では、7世紀から11世紀頃にかけてモン人によるドヴァーラヴァティー王国が発展した。	エーヤワディー(イラワディ)川下流域では、9世紀までビルマ(ミャンマー)系のピュー人の国があり、 <u>綿布を産出し、東南アジア各地や中国南西部と交易をおこなった。…(中略)…</u> チャオプラヤ川下流域では、7世紀から11世紀頃にかけて、モン人によるドヴァーラヴァティー王国が <u>海上・河川交易で発展した③</u> 。 <u>③ドヴァーラヴァティー王国がチャオプラヤ川流域の交易網をおさえたことは、同じく交易を基盤とした周辺の扶南やピュー人の国家に打撃を与えた。</u>	同上
第4章				
63	11行 ・ 註①	前539年にはバビロンを占領して、翌年ユダヤ人を捕囚から解放した。	前539年には <u>新バビロニアも征服した①</u> 。 <u>①キュロス2世は新バビロニアの都バビロンを占領したのち、ユダヤ人を捕囚(→p.26)から解放したとされる。</u>	アケメネス朝が新バビロニアを征服したことをよりわかりやすくしたうえで、ユダヤ人解放に関する記述を註へ移動。
64	20～22行	大いに栄えた。	大いに栄えた。 <u>また西方では、前1世紀以降、セレウコス朝を倒したローマ帝国と勢力争いを繰り広げた。</u>	第4章全体の趣旨(西アジアと地中海周辺の国家形成)に鑑み、パルティアとローマの関係を補足。
66	註①		(註を新設) <u>①かつては文献史料や考古学的遺物の乏しさから「暗黒時代」と呼ばれていたが、近年発掘調査が進んで多くの遺跡・遺物が明るみに出たため、より正確を期して「初期鉄器時代」と呼ぶこともある。</u>	初期鉄器時代に関する説明を補足。
69	7～10行 ・ 註①	<u>クレステネス</u> は、血縁にもとづく旧来の4部族制を、地縁共同体である区(デーモス)を基礎として10部族制に改める大改革をおこない、アテネ民主政の基礎を築いた。	<u>クレステネス</u> は、 <u>旧来の4部族制を、地縁共同体である区(デーモス)にもとづいた10部族制に改め、また新たに500人評議会①を設けるなど大改革をおこない、アテネ民主政の基礎を築いた。</u> <u>①一般市民から選ばれた任期1年の評議員500人からなる会議で、民会(→p.70)の議題を準備し、また役人を監督して行政を指導した。</u>	近年の研究動向を反映(旧来の4部族制が血縁組織でなかったことは今世紀に入ってから定説となっているため)。あわせて、500人評議会に関する説明も補足。
69	註②	<u>①</u> 僭主になる恐れのある人物の名を市民たちが陶器の破片(オストラコン)に書いて投票し、全部で6000票以上集まったときに最多得票者を10年間国外に追放する制度。	<u>②</u> 一人の人物の名を市民たちが陶器の破片(オストラコン)に書いて投票し、全部で6000票以上集まったときに最多得票者を10年間国外に追放する制度。 <u>その目的が何であったかについては説が定まらないが、有力者どうしの政争が内乱に発展するのを防ぐためとする説が有力。</u>	近年の研究動向を反映(僭主の出現予防が目的であるとする従来の通説は、現在批判的に捉えられているため)。 ※橋場弦ほか編『探究する古代ギリシア・ローマ史』(山川出版社、2026年)参照。

75	6～10行	前1000年頃、古代イタリア人が北方からイタリア半島に南下し、定住した。そのなかのラテン人の一派によって、ティベル川のほとりに建設された都市国家がローマである。	前1000年頃、古代イタリア人が北方からイタリア半島に南下し、定住した。半島南部では、前8世紀半ば以降ギリシア人が多くの植民市を建設した。中西部でも、先住民のエトルリア人がギリシア人の影響を受けて各地に都市をつくり、その都市文明は前7世紀後半に繁栄の時代を迎えた①。そうしたなか、古代イタリア人のうちラテン人の一派がティベル川のほとりに建設した都市国家が、ローマである。 ①ギリシア人の進んだ文化を受け入れたエトルリア人は、とくに金属加工や農業の技術を発達させた。また共通の言語と文化をもっていたが、統一国家をつくることはなかった。彼らの土木・建築技術や宗教・統治制度は、のちローマ人に受け継がれた。	第1章や第4章2節とのつながり、また近年の研究動向などを考慮して、ローマ成立以前のイタリア半島の状況を補足。
75	29	支配階層	支配階層（ノビレス）	ラテン語表記を補足。
77	註④		（註を新設） ④この時期にローマはセレウコス朝（→p.64）を滅ぼしてシリア方面を支配下においたが、これ以降長く東方のパルティアと、のちにはササン朝と対立することになった。	第4章全体のつながりなどを考慮して、註を補足。
79	12～15行	治世末期頃から、帝国財政の行き詰まりや経済の不振がしだいにあらわになってきた。3世紀には各属州の軍団が…	治世末期頃から、広大な帝国の統治体制や財政の行き詰まりがしだいにあらわになった。3世紀に入って外敵の攻撃が激しくなると、国境を守る軍隊の役割が大きくなり、各地の軍人が勢力を強めた。その結果、各属州の軍団が…	ローマ帝国が衰退した背景や、軍人の勢力拡大、および軍人皇帝時代の到来の流れを補足。
84	26～30行 ・ 註③	景教と呼ばれた。	景教と呼ばれた。451年のカルケドン公会議では、キリストの神性と人性は融合して1つであるとする単性論が異端とされたが、その後エジプトやシリアなどで存続した③。こうして、地中海世界にキリスト教という一神教が広がり、それはのちのイスラーム教の成立にも深い影響をおよぼした。 ③コプト教会・シリア教会・アルメニア教会などがこれにあたる。	カルケドン公会議や単性論に関する記述、および次の第5章と接続する文章を追加。
第5章				
85	12～16行	砂漠の広がるアラビア半島で、点在するオアシスを中心に遊牧や農業、隊商交易に従事していたアラブ諸部族が、半島外に急速に拡大し、広大な領域の新たな支配者となった。	砂漠の広がるアラビア半島では、アラブ人の諸部族が、点在するオアシスを中心に遊牧や農業、隊商交易に従事していた。彼らはササン朝・ビザンツ帝国のあいだで統一的な勢力を形成できずにいたが、7世紀前半以降半島外に急速に拡大し、広大な領域の新たな支配者となった。	（該当箇所が初出であるため）アラブ人に関する説明を補足。
87	註④		（註を新設） ④ムハンマドの従兄弟で、もっとも早い時期にイスラーム教を受け入れた1人。ムハンマドの娘ファティマと結婚した。	アリーに関する説明を補足。
87	註⑤		（註を新設） ⑤クライシュ族のなかで有力なウマイヤ家の出身。ウマイヤ家は当初ムハンマドを迫害していたが、メッカを征服された際にイスラーム教に改宗した。ムアーウィヤはシリア方面の征服で活躍し、同地を拠点に勢力をのばした。	ウマイヤ家やムアーウィヤに関する説明を補足。
90	7～9行	10世紀後半には、北アフリカにおこったシーア派のファティマ朝がエジプトを征服した。	10世紀後半には、北アフリカにおこったシーア派のファティマ朝がエジプトを征服し、新都カイロを建設した。	ファティマ朝によるカイロ建設の記述を補足。

90	図	図「カイロの「勝利の門」」を「アズハル=モスク」に差し替え 図「ファーティマ朝で発行された金貨」を追加		「ファーティマ朝で発行された金貨」は、第6章110頁とのつながりも考慮して追加。
90	16～20行	名目的なものとなっていった。	名目的なものとなっていった。 <u>ただし、こうした諸政権はいずれもイスラーム教徒による政権であった。イスラーム教の成立とアラブ人の征服活動で始まった西アジア・北アフリカの政治的な変化は各地に定着し、しだいに人々のイスラーム教への改宗が進むなど、社会の変化にもつながった。</u>	第5章1節の節の問いも考慮して、本節の意義に関する説明（現代にもつながる、西アジア・北アフリカの政治的・社会的なイスラーム化）を補足。
93	15～20行	民族大移動の波は一応の終息をみた。 他方、アラビア半島から急速に広がったイスラーム勢力は、ウマイヤ朝時代にイベリア半島に渡って西ゴート王国を滅ぼした(711年)。	民族大移動の波は一応の終息を <u>むかえ、地中海西部にはゲルマン人の諸国家が並び立つこととなった。</u> 他方、 <u>おもにビザンツ帝国の統治下にあった地中海東部では、7世紀以降アラビア半島からイスラーム勢力が急速に拡大した。ウマイヤ朝時代には、彼らは北アフリカを征服してさらにイベリア半島へと進出し、711年に西ゴート王国を滅ぼした。</u>	地中海の東西におけるゲルマン人の移動による影響の対比や、理解のしやすさを考慮して、文章を調整・補足。
94	12～14行	支配を復活させた。内政においては…	支配を復活させた。 <u>また、侵入を繰り返していたササン朝のホスロー1世とは和議を結び、これにより東方の国境はしばらく安定した。内政では、…</u>	第4章とのつながりを考慮して、記述を補足。
94	16～18行	発展の基礎を築いた。	発展の基礎を築いた。 <u>しかし大帝の死後、帝国はゲルマン諸国家に再びイタリアを奪われ、さらに東方ではササン朝を滅ぼしたイスラーム勢力と対峙したうえ、北方のスラヴ人の進出にも直面することとなった。</u>	第7章などとのつながりを考慮して記述を補足。
98	6～8行	神聖ローマ帝国 の始まりである。皇帝位は…	神聖ローマ帝国 の始まりである。 <u>また、皇帝は聖職者の任免権を握り、教会を帝国の統制下においた（帝国教会政策）。</u> 皇帝位は…	第7章の聖職叙任権闘争とのつながりや、神聖ローマ帝国における宗教（カトリック）の位置づけ（統治・行政との関連性）などを考慮して、帝国教会政策に関する記述を追加。
99	図	封建社会に関する模式図を追加		
第6章				
103	部扉	扉図版（「姑蘇繁華図」）を、図「第Ⅰ部から第Ⅱ部へ」に変更		第Ⅰ部と同様に、第Ⅰ部～第Ⅱ部にまたがる時期を概観することのできる図に変更。
108	1～3行	そのうち、ハルジー朝は地租の金納化をはじめとする経済改革を実施し、のちにムガル帝国の統治に受け継がれた。	そのうち、ハルジー朝は北方から侵攻してきた <u>モンゴル勢力に対抗し、地租の金納化などの経済改革を実施した。こうした改革は、のちにムガル帝国の統治にも受け継がれた。</u>	第8章とのつながりも考慮して、ハルジー朝の改革についてその背景を補足。
112～113	18～8行	さらに、サラフ=アッディーンは1187年に十字軍からエルサレムを奪回した。 十字軍は、西アジア社会にとって突然の侵入者であり、以前からこの地に住んでいたイスラーム教徒とキリスト教徒のあいだにも対立をもたらした。しかし、十字軍国家が長く存続したことにもなって、西ヨーロッパと西アジアとの文化的・経済的な接触や交流もうながされた。 アイユーブ朝は、ファーティマ朝時代のシーア派にかわってエジプトでスンナ派の支配を回復させるとともに、イクター制を採用し、トルコ系のマムルークを重用した。そのなかから、つぎのマムルーク朝が生まれた。	サラフ=アッディーンは1187年に十字軍国家からエルサレムを奪回し、 <u>これを受けて結成された第3回十字軍とも戦って、シリアの大部分を保持した。国内では、アイユーブ朝はファーティマ朝時代のシーア派にかえて、エジプトにおけるスンナ派の支配を回復させた。また、イクター制を導入して経済基盤を整え、トルコ系のマムルーク軍団を重用した。</u> 十字軍は、西アジア社会にとって突然の侵入者であり、以前からこの地に住んでいたイスラーム教徒とキリスト教徒のあいだにも対立をもたらした。しかし、十字軍国家が長く存続したことにもなって、西ヨーロッパと西アジアとの文化的・経済的な接触や交流もうながされた。	サラフ=アッディーンやアイユーブ朝の記述に関して、時系列を調整し、第3回十字軍や国内政策にもふれるなど、細部を補足。

第7章

117	図	図「カトリックの階層制組織」を、教会と修道院の系統をわけるかたちに変更	
122	図	図「中世の職人」を図「ギルドの親方と弟子」に変更	より本文に対応した図に変更
123	6～12行	10世紀～11世紀前半にかけて、ビザンツ帝国はいったん勢力を回復したが、11世紀後半にはセルジューク朝の侵入を受けた。また…	<p>10世紀～11世紀前半にかけて、ビザンツ帝国は<u>軍事力を大いにのばし、再び繁栄期を迎えた。南イタリアをイスラーム勢力から奪回するとともに、バルカン半島ではブルガリア帝国を滅ぼし、東はティグリス・ユーフラテス川上流、北はドナウ川流域にまで領域を広げた②</u>。しかしその後、<u>11世紀後半にはセルジューク朝の侵入を受けてアナトリアの大半を失うなど、帝国は衰退に向かった。帝国の権威が低下したことは、スラヴ人など周辺諸民族の自立をうながすことにつながった。また…</u></p> <p><u>②10世紀に西方で神聖ローマ帝国（→p.98）が成立すると、帝国の正統性をめぐってビザンツ帝国と対立したが、両皇帝家による婚姻政策によって関係は安定化した。</u></p>
126	註①		<p>（註を新設）</p> <p><u>①この頃に黒死病がヨーロッパで流行した原因としては、モンゴル帝国の成立によってユーラシア東西を結ぶ交易や人の移動が活発化したことがあげられる（→p.7、148）。また、黒死病の流行はこののちもしばしばおこり、人口の減少は15世紀末まで続いた。</u></p>
127	註⑤		<p>（註を新設）</p> <p><u>⑤古代のバビロン捕囚（→p.26）にたとえてこのように呼ばれるが、フランス王に強制的に幽閉されたわけではなく、あくまでも教皇側の意向によるものであった。また、この時期に教皇庁の組織が整備された。</u></p>
132	註①		<p>（註を新設）</p> <p><u>①ドイツ騎士団は、神聖ローマ帝国からの領土寄進などによって勢力をのばし、その後バルト海沿岸においてスラヴ系住民のキリスト教化をめざして活動していた。</u></p>
133	10～12行	国内統一をさらに困難なものとした。	<p>国内統一をさらに困難なものとした。<u>こうした争いのなか、のちのルネサンス期に一部の都市国家では、貴族の有力家門が権力を掌握した。</u></p>
133	13～16行	北欧では、14世紀末にデンマークの摂政マルグレーテが主導して、デンマーク・スウェーデン・ノルウェーの3国のあいだに <u>カルマル同盟</u> が結ばれ、同君連合の王国が成立して一大勢力となった。	<p>北欧では、<u>デンマーク・スウェーデン・ノルウェーの3国が、バルト海の商業利権をめぐってハンザ同盟などと競合した。14世紀末にはデンマークの摂政マルグレーテの主導で、3国のあいだにカルマル同盟が結ばれ、同君連合の王国が成立して一大勢力となった。</u></p>
134	図キャプション	開墾する修道士 修道院は開墾運動を指導するとともに、農業技術の向上にも貢献した。シトー修道会の写本より。12世紀。	<p>12世紀以降、<u>シトー会の修道院は、修行にふさわしい場所として人里を離れた荒野を開墾してつくられるようになった。そのため修道院は開墾運動を指導するとともに、農業技術の向上にも貢献した。シトー修道会の写本より。12世紀。</u></p>
136	註①		<p>（註を新設）</p> <p><u>①騎士道物語以外にも、ダンテ（→p.178）がキリスト教的世界観にもとづく『神曲』を俗語で著し、後世に大きな影響を与えた。</u></p>

第8章			
139	表	現行本では註のかたちだった新法の記述を、表「王安石の新法」のかたちに変更。 また、均輸法については表には記載せず、市易法との関係をキャプションで説明。	均輸法は施行後まもなく市易法に吸収されているため、市易法の説明に統合するかたちに変更。 ※松丸道雄ほか編『世界歴史大系 中国史 3』参照
141	註④	④…(中略)…ここをおさえて勢力をのばした。	④…(中略)…ここをおさえて勢力をのばした。 <u>宋から日本へは銅銭・陶磁器・絹織物・書籍・南海産の香料・薬品などが、日本から宋へは金・硫黄・水銀・木材・漆器などが輸出された。</u>
146	9～10行 ・ 註①	取引税などによって莫大な銀を集め、紙幣(交鈔)…	取引税などで莫大な銀を集め、 <u>塩の手形(塩引)①</u> や紙幣(交鈔)… ①商人が塩を仕入れるのに必要な引換券で、 <u>確実な利益を生むため、高額紙幣と同様に機能した。</u>
146	12～22行	元の統治は中国的な官僚制度によってなされたが、中枢はモンゴル人が握った。 色目人 と総称される中央アジア・西アジア出身者は、経済面で力をふるった。金の支配下にあった契丹人・女真人を含む華北の人々は 漢人 、南宋のもとにいた人々は 南人 と呼ばれた。商業に力を入れた元は支配地域の社会や文化をさほど重視せず、儒学や科擧の役割は大きく後退したが、暦の改良や大都の水運整備に従事した郭守敬のように、実用的な能力のある者には登用の道が開かれていた。支配層のモンゴル人には チベット仏教 が重んじられ、都市の庶民のあいだでは『西廂記』『琵琶記』に代表される戯曲が流行した(元曲)。	<u>元の統治下では、服属した時期など、モンゴル支配層との関係の深さに応じて人々が分類された。色目人と総称される中央アジア・西アジアなどの出身者は、経済や宗教・科学技術といった様々な分野で力をふるった。金の支配下にあった契丹人・女真人を含む華北の人々は漢人、南宋のもとにいた人々は南人と呼ばれ、中国における行政の実務を担った。元では出自を問わず、適性に応じて人材を高官に抜擢したので、官吏登用における科擧や儒学の役割は後退した。</u> <u>元は商業に力を入れ、支配地域の社会や文化には強く干渉しなかったため、学問や商業が栄えた。郭守敬は暦の改良や大都の水運整備に活躍し、都市の庶民のあいだでは『西廂記』『琵琶記』に代表される戯曲が流行した(元曲)。支配層のモンゴル人にはチベット仏教が重んじられた。</u>
147	史料	図「ヴェネツィアから出発するマルコ=ポーロの一行」を史料「『世界の記述』(『東方見聞録』)」に変更。	
149	註⑤	⑤キプチャク=ハン国のもとでイスラーム化した遊牧集団の総称。中央アジアのオアシス地域でしだいに定住化した。	⑤キプチャク=ハン国のもとでイスラーム化した遊牧集団の総称。中央アジアのオアシス地域でしだいに定住化し、 <u>ブハラ=ハン国(1500～1920)、ヒヴァ=ハン国(1512～1920)、コーカンド=ハン国(1710頃～1876)の3ハン国を建てた。</u>
第9章			
154	註①	①当時モンゴルを統合した…(中略)…1550年には北京を包囲した。	①当時モンゴルを統合した…(中略)…1550年には北京を包囲した。 <u>また明はモンゴルに対抗するため北方に大軍を駐屯させたが、その費用を銀納による税でまかなったため、中国全土で銀の需要が高まった。</u>
154	註②	②16世紀の倭寇を後期倭寇と呼ぶのに対し、14世紀の倭寇を前期倭寇という。	②中国全土での銀の需要増を背景に、 <u>倭寇の活動も活発化した。なお、16世紀の倭寇を後期倭寇と呼ぶのに対し、14世紀の倭寇を前期倭寇という。</u>
155	図	図「『西遊記』の挿絵」を追加	
156	註		(註を新設) ①鹿皮は柔軟で耐久性があるため、 <u>甲冑や刀など武器の一部として用いられた。この時期の日本は、大量の鹿革を海外から輸入した。</u>
160	註③	③スペイン人がもちこんだ疫病も、先住民に大きな打撃を与えた。なお、北米大陸に入植したイギリス人・フランス人・オランダ人も、武力で先住民から土地を奪った。	③同じ頃、 <u>マヤ文明(→p.36)の主要地域もスペインの「征服者」たちによって征服された。なお、イギリス人・フランス人・オランダ人も、入植した北米大陸において先住民から武力で土地を奪った。</u>
			9章全体における銀の流れなどを考慮して、北虜南倭と銀の動きとの関連について補足。 ※尾形勇ほか編『新版世界各国史 中国史』(山川出版社、1998年)、273～277頁など参照。
			同上
			鹿革の用途について、日本との関連も考慮して説明を補足。
			マヤ文明もアステカ文明やインカ帝国などと同様に「征服者」(コンキスタドール)によって滅ぼされたことを補足。

第 10 章			
164	図	図「オスマン帝国の軍楽隊」を追加。	東西の文化交流に関する註④の一例として。
165	図	図「アッバース 1 世」を追加。	
166	註②	②十二イマーム派は… (中略) …もたらすとする思想をもつ。	②十二イマーム派は… (中略) …もたらすと説く。同派では、再臨の時まで人々を指導するウラマーの役割が大きくなった。
166	22～23 行	騎兵・騎馬数と給与を定めるマンサブダル制を導入した。さらに、全国の土地を測量して徴税をおこなう制度を導入し、中央集権的な…	騎兵・騎馬数と俸給⑤を定めるマンサブダル制を導入した。また、徴税のために全国的な土地の測量をおこなうなど中央集権的な… ⑤イクター制 (→p.111) と同様に、俸給に相当する額の土地の徴税権が与えられることが多かった。
167	註⑦		(註を新設) ⑦北インドのイスラーム諸政権が用いる騎兵に対抗するため、南インドの諸王朝も馬を必要とした。そのため、インド西岸の港市では多くの馬が輸入された。
168	3～9 行		ムガル帝国時代のインドでは、綿織物や絹織物などの手工業が発展した。また、首都のデリーやアグラ、さらには宗教や交易の拠点となる都市が成長し、農産物の流通網も発展した。くわえて、17 世紀後半から西ヨーロッパでインド産綿織物の需要が高まり、さらに 18 世紀後半にかけてオランダやイギリスなどの東インド会社による綿織物の購入が増大すると、その対価として銀や金、日本の銅などが流れ込み、貨幣経済が進展した。
170	註①	①アルゲン川と… (中略) …対等の形式で条約が結ばれた。	①アルゲン川と… (中略) …対等の形式で条約が結ばれた。また、1727 年にはキャフタ条約を結び、ネルチンスク条約で未定であった西部国境を定め、通商関係の事項を取り決めた。
172	図	図「日本(江戸時代)の対外関係」を追加。	
175	図	図「シノワズリ」を追加。	
第 11 章			
177	4～6 行	ルネサンスの目的の 1 つは、人が価値あるものとして現世を生きるための指針を得ることにあり、	ルネサンスの目的の 1 つは、 <u>キリスト教信仰の学問的な体系化をおもな目的とした中世のスコラ学を乗り越えて、人が現世を価値あるものとして生きるための指針を得ることにあり、</u>
177	8～10 行	中世の西ヨーロッパでギリシア語は忘れられていたが、オスマン帝国の圧迫でビザンツ帝国から逃れた知識人によって伝えられた。	<u>ギリシア語は中世の西ヨーロッパで忘れられていたが、古典研究が盛んであったビザンツ帝国との交流を通じてイタリアへ伝えられた。</u>
178	第 2・第 3 段落	小見出し「ルネサンスの広がり」に関して、現行版では「発明」→「文芸」の順であった第 2・第 3 段落を、「文芸」→「発明」の順に入れ替え。	年代や、次節「宗教改革」とのつながりなどを考慮して変更。
182	註②		(註を新設) ②ツヴィングリは、その後ルターと決別した。また、 <u>ツヴィングリの死後、ツヴィングリ派はカルヴァン派と連携するようになった。</u>
187	註③	③最初の計画であるヴァージニア植民が失敗したのち、17 世紀初めに建設されたジェームズタウンが、最初の永続的な植民地となった。	③16 世紀末に北米東部への植民が計画されたが、まもなく失敗に終わった。 <u>17 世紀初めに再び同地域への植民が試みられ、ジェームズタウンを中心にヴァージニア植民地が成立した。これは最初の永続的な植民地となった。</u>
			第 7 章の記述とのつながりも考慮して、よりわかりやすくなるように記述を変更。
			ギリシア語の伝播に関して、ビザンツ帝国が当時オスマン帝国の侵攻を受けていたのは事実だが、実態としては、イタリアの都市共和国から招聘された学者によって伝えられたことなどによるため。
			ルターとツヴィングリの関係について補足。
			第 12 章とのつながりを考慮し、ヴァージニア植民地についてふれたうえで、文章をよりわかりやすいように変更。

188	註②		(註を新設) ②また、フランスは神聖ローマ帝国からアルザスを獲得した。なおスペインはこの条約に参加せず、フランスと戦争を続けたが、のちにスペイン王女とフランス国王ルイ 14 世との婚姻を約束して講和した。	第 13 章とのつながりなどを考慮して、アルザスおよびピレネー条約に関する記述を補足。
188	註③		(註を新設) ③代表的な領邦国家として、オーストリアやプロイセン (→p.196)、ハノーファー (ハノーヴァー) などが台頭した。	以降の記述とのつながりを考慮して、記述を補足。
190 ～ 192		現行版「イギリスの 2 つの革命」の小見出しを、「ピューリタン革命とイギリスの共和政」「名誉革命」の 2 つに分割し、記述を補足。		
193	註④		(註を新設) ④この反乱には、三十年戦争後も続いたスペインとの戦争(→p.188 註②)による増税で苦しんだ都市民や農民層も参加した。	フロンドの乱に関して、近年の研究動向なども考慮して、より実態にそうかたちで註を補足。
193	註⑤	④国内でも…(中略)…すぐれた作品を生んだ。古典主義は美術にも広まり、バロック様式(→p.183)にかわる文化の主流となった。	⑤国内でも…(中略)…すぐれた作品を生んだ。古典主義はのちに美術にも広まり、 <u>ダヴィド(→p.215、239)らの作品によってバロック様式(→p.182)にかわる絵画の主流様式となった。</u>	美術における古典主義に関して説明を補足。
193	9 行	東インド会社を改革・国営化して…	東インド会社を <u>設立</u> して…	従来は 17 世紀初頭のアンリ 4 世時代の特許状を念頭におくかたちだったが、この時点でアジア方面との貿易はおこなわれず、実態も不明確であるため、17 世紀後半のコレベールによるものを実質的な設立とみなすかたちに変更。
194	註①	①スペイン継承戦争は、ユトレヒト条約の翌年に結ばれた講和条約によって完全に終結した。	①スペイン継承戦争は、ユトレヒト条約の翌年に結ばれた講和条約によって完全に終結した。 <u>この条約により、ネーデルラント南部(→p.186)はオーストリア領となった。</u>	次章以降とのつながりを考慮して、ネーデルラント南部の帰属に関する記述を補足。
194	註⑤		(註を新設) ⑤他方、フランスも西インド諸島に植民地を維持し、 <u>奴隷制プランテーションのもとで砂糖やコーヒーを生産した。</u>	第 12 章のハイチ革命などとのつながりを考慮して、フランスの植民地支配に関する説明を補足。
197	註⑥		(註を新設) <u>スペイン継承戦争(→p.193)にオーストリア側で参戦した功績により、1701 年に皇帝(オーストリア大公)から王国の位を認められた。</u>	プロイセンの王国昇格に関する説明を補足。
198	図	図「サンスーシ宮殿でフルートを演奏するフリードリヒ 2 世」を「サンスーシ宮殿とその内部装飾 (ロココ様式)」に変更		
199 ～ 200	小見出し	現行版「科学革命」の小見出しの後半部を、小見出し「理性の哲学」として分けるかたちに変更。		
199	20～22 行	こうした一連の変化を科学革命と呼ぶ。	こうした一連の変化を科学革命と呼ぶ。 <u>18 世紀に入ると、実験器具の発達を背景に様々な元素が発見され、化学の発達が始まった⑦。また生物も科学的探究の対象となり、リンネが生物の分類法を確立して、人類を哺乳類のうちに位置づけた⑧。</u> <u>⑦古代ギリシア以来、17 世紀までは、「火・空気・水・土」が物質の根源をなすと考えられていた。</u> <u>⑧この結果、人間をほかの生物と厳格に区別するキリスト教の考え方に変化がもたらされた。</u>	次の第 13 章とのつながりなども考慮して、段落を追加。
200	註②	③アダム＝スミスは、各国が国際商業で争う時代では、 <u>重商主義的な特権や規制は撤廃して、経済の不都合は市場の自動調節機能に任せるほうがよいとする自由放任の政策をとらえた。</u>	②またアダム＝スミスは、各国が国際商業において競争する時代では、 <u>重商主義的な特権や規制は撤廃して、貿易の活発化を実現した方が国力の増大をもたらすと</u> <u>して、19 世紀の自由貿易 (→p.223) に通じる考えを主張した。</u>	第 12・13 章とのつながりを考慮して、表現を変更。

第12章			
203	部扉	図「1854年のペリーの横浜上陸を描いた石板画」「サンラザール駅」を追加。	日本や交通革命などのつながりを考慮。
208	29～31行 ・ 註⑥	推し進めた。また、イギリスが19世紀初めに工業機械の輸出を解禁したこともあって、産業革命は同世紀前半にベルギー・フランス・アメリカ合衆国北部・ドイツにも波及した⑥。 ⑥これらの国々は、のちに世界経済においてイギリスと並んで中心的な役割を占めることになった。また、19世紀後半には、イタリア・ロシア・北欧などに加えて、日本でも産業革命が始まった。	推し進めた。また産業革命は19世紀前半にベルギー・フランス・アメリカ合衆国・ドイツに波及し、ここにイギリスを先頭とした欧米諸国が他地域に優越する世界経済の形成が始まった⑥。 ⑥19世紀初めにイギリスが工業機械の輸出を解禁したことから、各国に産業革命が波及した。また、19世紀後半には、イタリア・ロシア・北欧などに加えて、日本でも産業革命が始まった。
211	16行	州の自立性を重視する州権派	州の自立性を重視する州権派（反連邦派）
212～213		現行版「フランス革命」の小見出しを、「フランス革命のはじまり」「フランス革命の進展」の2つに分けるかたちに変更。また、あわせて文章表現もよりわかりやすいように調整。	
215	8行	国家元首として認められた（統領体制）。	国家元首として認められた（統領政府）。
216	註②		（註を新設） ②ナポレオンは兄をスペイン王にすえたが、スペイン人は抵抗戦争をおこし、1812年には自由主義的な憲法を制定してスペイン＝ブルボン朝（→p.193）のもとの立憲君主政を宣言した。この憲法はフランス撤退後に停止されたが、1820年の立憲革命（→p.221）で一時的復活した。
217	表	「ナポレオン関連年表」を追加	
217	節タイトル	中南米諸国の独立	環大西洋革命とラテンアメリカ諸国の独立 また、独立を境としてラテンアメリカの呼称を用いるかたちに変更。
第13章			
221	註⑤		（註を新設） ⑤復活したスペイン＝ブルボン朝に対して、1820年の軍人の反乱をきっかけに、自由主義者が政権を獲得した革命。停止されていた自由主義的憲法を復活させたが、23年に列強の干渉で挫折した。
222	2～5行 ・ 註①	ギリシア独立運動は、地中海やバルカン地域に利害関係をもつ列強の支持で、30年に独立を達成した。	ギリシア独立運動は、地中海やバルカン地域に利害関係をもつ英・仏・露3列強の支持で独立を達成した①。 ①ギリシアの独立は1830年に国際的に承認されたが、国境画定や国王選出などの問題を抱えていた。32年、国外から国王を迎えて、ギリシア王国が成立した。
224	6～10行	資本主義においては、労働者は自由な立場で労働してもその報酬を完全には受け取れない仕組み（搾取）があり、他方で資本家も利潤を無限に拡大することはできないため、こうした無理のある経済体制はいずれ崩壊すると論じて（マルクス主義）、大きな影響を与えた。	資本主義においては、労働者は正当な賃金を受け取ることができない仕組み（搾取）に苦しみ、他方で資本家の利潤拡大も必ず限界を迎えるため、こうした無理のある経済体制はいずれ崩壊すると論じた。彼らの経済思想と社会革命の構想は、総じてマルクス主義と呼ばれ、大きな影響力をもった。
225	図	図「ナポレオン3世」を追加。	
229～230	23行 ・ 1～4行	ガリバルディが義勇軍を率いて両シチリア王国を占領し、サルデーニャ王にゆだねた。	ガリバルディが義勇軍を率いて両シチリア王国を占領した。カヴールはこの動きに介入し、占領地をサルデーニャ王へと献上させるかたちで両シチリア王国を併合した。
232	註③	②また、ルーマニア・セルビア・モンテネグロの独立が承認され、ブリガリアはオスマン帝国内の自治国とされた。イギリスはキプロスの、オーストリアはボスニア・ヘルツェゴヴィナの占領と行政権を認められた。東ルメリア自治州は1885年以降、ブルガリアが併合した。	③会議の結果、ルーマニア・セルビア・モンテネグロの独立が承認され、ブルガリアはオスマン帝国内の自治国とされた。オーストリアはボスニア・ヘルツェゴヴィナの占領と行政権を認められた。イギリスは会議と同時期に、オスマン帝国との協定でキプロスの占領と行政権を認められた。

第 14 章					
245	註③		(註を新設) ③ <u>アブデュルハミト 2 世は 19 世紀末にパン＝イスラーム主義の思想家アフガーニー (→p.277) をイスタンブルにまねいたが、それは彼の思想を利用・監視するためであった。オスマン帝国をイスラーム世界の支柱とみなすアフガーニーの考えは帝国に都合がよかった一方、専制批判など過激な言動は容認できなかった。のちアフガーニーは軟禁されるなかで死去した。</u>	オスマン帝国 (アブデュルハミト 2 世) とアフガーニーとの関係を補足。	
251	20～22 行	タイでは 18 世紀の終わりに、バンコクを首都として ラタナコーシン朝 (チャクリ朝)が創始された。	タイでは、 <u>18 世紀後半にアユタヤ朝がコンバウン朝ビルマの攻撃を受けて滅亡したのち、その混乱のなかから、バンコクを首都にラタナコーシン朝(チャクリ朝)がおこった。</u>	アユタヤ朝の滅亡に関する記述を補足。	
251	24～25 行	19 世紀後半のラーマ 4 世の時代に自由貿易の原則が確認されて、	19 世紀後半のラーマ 4 世の時代に <u>イギリスと結んだ不平等条約 (パウリング条約) で自由貿易の原則が確認されて、</u>	第 12 章 1 節や第 14 章のほかの節との不平等条約に関するつながりや、国際関係論・経済史などでも条約名について言及されることがあるなどを考慮して、パウリング条約に関する記述を補足。	
252	14～23 行	小見出し「内外からの清朝の危機」の第二段落の文章を、時系列にそうかたちで調整。			
255	註④		(註を新設) ④ <u>アメリカ合衆国の西部開発 (→p.235) を背景に、中国との貿易と捕鯨のための寄港地確保をねらってペリーが派遣された。</u>	第 13 章 3 節とのつながりを考慮して、ペリー日本派遣の背景について補足。	
257	註⑨		(註を新設) ⑨ <u>農民軍と政府が和議を結んだことから両軍出兵の根拠は失われていたが、日本は朝鮮における清優位の体制をかえるため、清との戦争にもちこんだ。</u>	全州和約に関する記述を補足。	
第 15 章					
263	註⑤		(註を新設) ⑤ <u>19 世紀末に世界最大のユダヤ人口を有したロシアでは、アレクサンドル 2 世の暗殺 (→p.227) や 1905 年革命、十月革命期 (→p.282) など、政治・社会的な危機が生じるたびにユダヤ人に対する集団的な迫害 (ポグロム) がおこった。これはユダヤ人の国外移住とシオニズム運動が拡大する要因ともなった。</u>	以降の章や現代のパレスチナ問題とのつながりも考慮して、ロシアにおけるポグロムに関する記述を補足。	
268	図	図「チリにおける硝石の船積みの様子」を追加			
271	註③		(註を新設) ③ <u>朝鮮では、1895 年に日本公使が高宗の王妃 (閔妃) を殺害したことから日本に対抗する動きが高まり、翌年には高宗がロシア公使館に逃れて親露派政権が成立していた。</u>	閔妃殺害事件および露館播遷に関する説明を補足。	
273	22～25 行	こうしたなか、全国的な鉄道整備を進める清朝は、幹線鉄道を国有化し、外国からの借款を得て鉄道を建設しようとした。	こうしたなか、全国的な鉄道整備を進める清朝は、 <u>民間で建設が計画化されていた幹線鉄道を国有化し、外国からの借款を得て建設を進めようとした。</u>	経緯がよりわかりやすいように記述を補足。	
274	註①	① <u>中国同盟会を前身とする政党。1913 年に解散させられると、孫文らは秘密結社の中華革命党を結成し、19 年にこれを改組して大衆政党の中国国民党とした。</u>	① <u>中国同盟会を前身とする政党。1913 年の第二革命失敗後、袁世凱によって解散させられたが、翌 14 年に孫文らは秘密結社の中華革命党を結成した。19 年には五・四運動の影響を受けてこれを改組し、大衆政党の中国国民党 (→p.294) とした。</u>	国民党の解散や中華革命党の結成、および中国国民党への改組の背景に関する説明を補足。	
276	図	図「カルティニ」を追加。			

第 16 章			
286	図	図「国際連盟の組織」を追加	国際連盟と国際連合との比較も考慮して図版を追加。
292	図	グラフ「第一次世界大戦前後の日本と中国の貿易」を追加	
294	10～11 行 ・ 註②	中国に返還された。	中国に返還された。 <u>一方、大戦後の諸軍事勢力によるあいつぐ内戦や財政難②によって、北京政府の弱体化は進んだ。</u> <u>②地方から中央政府への送金が途絶したうえ、関税自主権を回復して関税収入を増やすこともできないなか、莫大な軍事費が財政を圧迫していた。</u>
299	10～15 行 ・ 註③	こうしたあい反する約束に加えて、大戦後にパレスチナはイギリスの委任統治領となったため、アラブ・ユダヤの両民族はそれぞれの権利を主張して対立し、現在まで続く深刻な <u>パレスチナ問題</u> が生まれることになった。	さらに大戦後、 <u>イギリスの委任統治下でユダヤ人の入植が進むと、アラブ人とユダヤ人の対立は深まり、1930年代後半にはアラブ人の大規模な反乱がおこった。</u> こうして、現在まで続く <u>パレスチナ問題</u> が生まれることになった③。 <u>③パレスチナでは長く、イスラーム教徒やキリスト教徒のアラブ人、さらにアラビア語を話すユダヤ教徒が共存していた。しかし、こうした関係は、ヨーロッパ諸国のナショナリズムと反ユダヤ主義を背景に生まれたシオニズム運動によってユダヤ人口が増大するにつれて失われていった。</u>
第 17 章			
302	註①	①ナチ党は…（中略）…ナチスとも呼ぶ。	①ナチ党は…（中略）…ナチスとも呼ぶ。 <u>国民社会主義とは、ドイツ民族・国民全体の団結をめざすといった意味である。</u>
305	地図	地図「日中戦争の拡大」に中国への援助ルートや線路などを追加。	線路の追加は、それにそって日本軍の進軍がおこなわれたため。
306	註①		（註を新設） <u>①日本軍は、地上部隊が侵攻できなかった重慶などの都市に対して、市街地も対象とする無差別爆撃をおこなった。</u>
313	註③		（註を新設） <u>③ポツダム宣言は、はじめアメリカ合衆国・イギリス・中国の名前で発表され、のちソ連も参加した。日本軍の無条件降伏要求や、降伏後の日本の処遇についての基本方針を明らかにした。</u>
314	図	図「国際連合の組織」を追加	国際連盟の箇所と同上。
314	23 行	「 <u>関税と貿易に関する一般協定</u> 」(GATT)	「 <u>関税及び貿易に関する一般協定</u> 」(GATT)
319	註②	②ソ連は、…（中略）…拒否権を行使できなかった。	②ソ連は、…（中略）…拒否権を行使できなかった。 <u>また、朝鮮戦争における国連軍は、一般的にこのように呼ばれるものの、厳密には国連憲章の規定に従って編制されたものではなく、各国の責任にもとづく多国籍軍であった。</u>
321	10～13 行	そのパレスチナでは、アラブ人とユダヤ人の対立が激化していた。	パレスチナでは、 <u>大戦前からユダヤ人移民の急増や土地取得に対するアラブ人の不満が高まり、両者の対立が激化していた。</u>
321	註⑤	⑥パレスチナ難民は、その後の戦争のほか、避難先で世代を重ねることによってさらに増加した。	⑤彼らは、 <u>1948～49年の事件をナクバ（大災厄）と呼び、記憶している。</u> パレスチナ難民は、その後の戦争のほか、避難先で世代を重ねることによってさらに増加した。

321	地図キャプション	第1次中東戦争	第1次中東戦争 <u>国連のパレスチナ分割決議案は、人口では3割ほどのユダヤ人に領土の57%を与えるという不平等なものだったが、ナチス＝ドイツのホロコースト（→p.310）を経験したユダヤ人への同情も背景に採択された。その後の戦争に勝利したイスラエルは、分割決議で定められた領域を大幅にこえる全パレスチナの約78%を獲得した。</u>	現代のパレスチナ問題を考える背景として、分割決議案の特徴やその後の経緯について補足。
第18章				
323	部扉	図「経済格差の是正を訴える「反ウォール街デモ」(アメリカ合衆国、2011年)」「核兵器禁止条約の発効を記念して、広島原爆ドーム前でおこなわれたイベント(2021年)」を追加。		
326	14～18行	一方、イギリスは西欧統合の動きから距離をおき、1960年に北欧諸国などとともにヨーロッパ自由貿易連合(EFTA)を結成した。しかし、その後はECへの参加を希望するようになり、1973年に認められた(拡大EC)①。	一方、 <u>イギリスはアメリカとの関係やイギリス連邦のまとまりを重視して西欧統合の動きから距離をおき、1960年に北欧諸国などとともにヨーロッパ自由貿易連合(EFTA)を結成した。しかし、その後は植民地の独立や経済不振を背景にECへの参加を希望するようになり、1973年に認められた(拡大EC)①。</u>	イギリスとECとの関係について、その経緯・背景を補足。
329	註④		(註を新設) <u>④植民地支配体制が終りを迎えた背景としては、第二次世界大戦を経て宗主国が政治的・経済的に疲弊したことや、植民地側でナショナリズムが高まったことがあげられる。</u>	この時期の大きな流れの一つである欧米諸国による植民地支配体制の終焉について、理解がしやすいように註を補足。
336	註②		(註を新設) <u>②ポルトガルの独裁政権は、青年将校を中心とする軍のクーデタで崩壊し、新政府が樹立された。新政府はアンゴラ・モザンビークなど植民地の独立を承認し、まもなく民政へと移管した。</u>	第19章2節などとのつながりを考慮して、ポルトガルの新政府樹立、およびアンゴラ・モザンビークの独立について補足。
336	31行	プロレタリア文化大革命 1966～77	プロレタリア文化大革命 1966～76	従来は1977～78年の中共11全大会における文革終了宣言を終わりの年代として採用していたが、実質的な終了年に変更。
338	23～24行	国民会議派の政権が長く続き、非同盟外交とともに計画経済が推進された。	国民会議派の政権が長く続き、「 <u>社会主義型</u> 」の 国家建設を目標に非同盟外交と計画経済が推進された。	インド国民会議派の政策の特徴について補足。
第19章				
339	註②		(註を新設) <u>②このように、政府の役割を拡大して経済や社会に積極的に介入する政策は、「大きな政府」とも呼ばれる。</u>	「大きな政府」に関する説明を補足。
341	註⑧		(註を新設) <u>⑧経済活動に対する規制などの政府の権限や、政府が提供する行政サービスの規模を、可能な限り小さくしようとする政府をいう。</u>	「小さな政府」に関する説明を補足。
342	15～16行	イスラエルは圧勝し、シナイ半島などに占領地を拡大する一方、…	イスラエルが <u>エジプトなどに圧勝して、ヨルダン川西岸やガザ地区、シナイ半島、ゴラン高原に占領地を拡大した。</u> 一方、…	現代の諸課題とのつながりも考慮して、イスラエルによる占領地域を明確にするかたちに変更。
343	5～7行	イラン＝イラク戦争 が始まり、決着がつかぬまま88年まで続いた。	イラン＝イラク戦争が始まった。 以後イランと合衆国との敵対関係は、 <u>パレスチナ問題とともに、産油国の集中する中東における国際関係の焦点となっている。</u>	該当箇所の記述について、現代の諸課題とのつながりも考慮して、世界史的な位置づけを補足。
347	註①	南アフリカ連邦(→p.261)は、1961年に連邦から脱退して、南アフリカ共和国となった。	南アフリカ連邦(→p.261 註①)は、 <u>アパルトヘイト政策を批判されたことを背景に1961年にイギリス連邦から脱退して、南アフリカ共和国となった。</u>	イギリス連邦からの脱退および南アフリカ共和国への再編について経緯を補足。
347	図キャプション	マルタ会談 1989年12月、地中海のマルタ島沖のソ連客船内でゴルバチョフ(右)とブッシュ(左)が会談し、冷戦の終結を宣言した。	マルタ会談 <u>地中海、マルタ島沖の客船内でゴルバチョフ(右)とブッシュ(左)が会談し、新しい平和の時代の到来を宣言した。また、この会談は東西ドイツ統一に向けた交渉のきっかけともなった。</u>	マルタ会談の実態や以降のドイツ統一との関連などの記述を補足。

351	註③		(註を新設) ③2014年にはインド人民党のモディ(1950～)が政権を握り、それ以降、新自由主義的(→p.341)な経済成長政策を進めている。	ここ10年ほどインド人民党政権が継続していることを鑑み、近年の情報を補足。
352	註①		(註を新設) ①2000年には第2次インティファダがおこった。また、イスラエルへの抵抗運動のなかで生まれたイスラーム主義組織のハマースは、2006年パレスチナ議会選挙で勝利して、翌年からガザ地区を実効支配した。これに対してイスラエルはガザ地区を封鎖した。	小見出し「対テロ戦争と中東情勢」とのつながりも考慮して、オスロ合意およびラビン暗殺後のパレスチナの動向について補足。
355	10～12行 ・ 註⑥	ターリバーン政権に対して軍事行動をおこし、これを打倒した(対テロ戦争)。	ターリバーン政権に対して軍事行動をおこし、これを打倒した。この戦争は、従来の国と国とのあいだの戦争ではなく、 <u>対テロ戦争⑥</u> と呼ばれる新しい戦争であった。 ⑥国家がテロ組織と戦う戦争のことをいう。	対テロ戦争について定義を説明するかたちに変更。
355	21～26行	しかし、その後にチュニジアなどでは民主化が進んだものの、エジプトでは、成立したイスラーム主義政党による政権が14年に倒れて軍事政権がとってかわるなど、ゆり戻しの動きや混乱もおこっている。また、シリアでは内戦が発生して多数の難民が生まれた。14年には、イラクとシリアにまたがる過激な武装勢力⑦が出現し、地域情勢は危機におちいった。	こうした動きは民衆による革命の可能性を示し、チュニジアでは民主化が進んだが、その後はエジプトで軍事政権が復活するなど、ゆり戻しの動きもおこっている。また民主化運動が波及したシリアでは内戦が発生し、多数の難民が生まれた。14年には、イラクとシリアにまたがる過激な武装勢力⑧が出現し、地域情勢はさらに混乱した。	「アラブの春」関連の説明について、よりわかりやすいように表現を調整。
355	27～31行		<u>パレスチナでは、イスラエルが自国の安全保障を主張してパレスチナ自治区に対する侵攻や封鎖をおこない、2023年ハマースの攻撃を受けると、ガザ地区への破壊的な反撃をおこなった。その結果、多数の市民が犠牲となる甚大な人道危機が生じたが、国連の安保理はこの惨事にも有効に機能せず、パレスチナ問題に対する国際社会の対応が問われている。</u>	昨今の動向も考慮し、最新のパレスチナ情勢に関する記述を追加。